

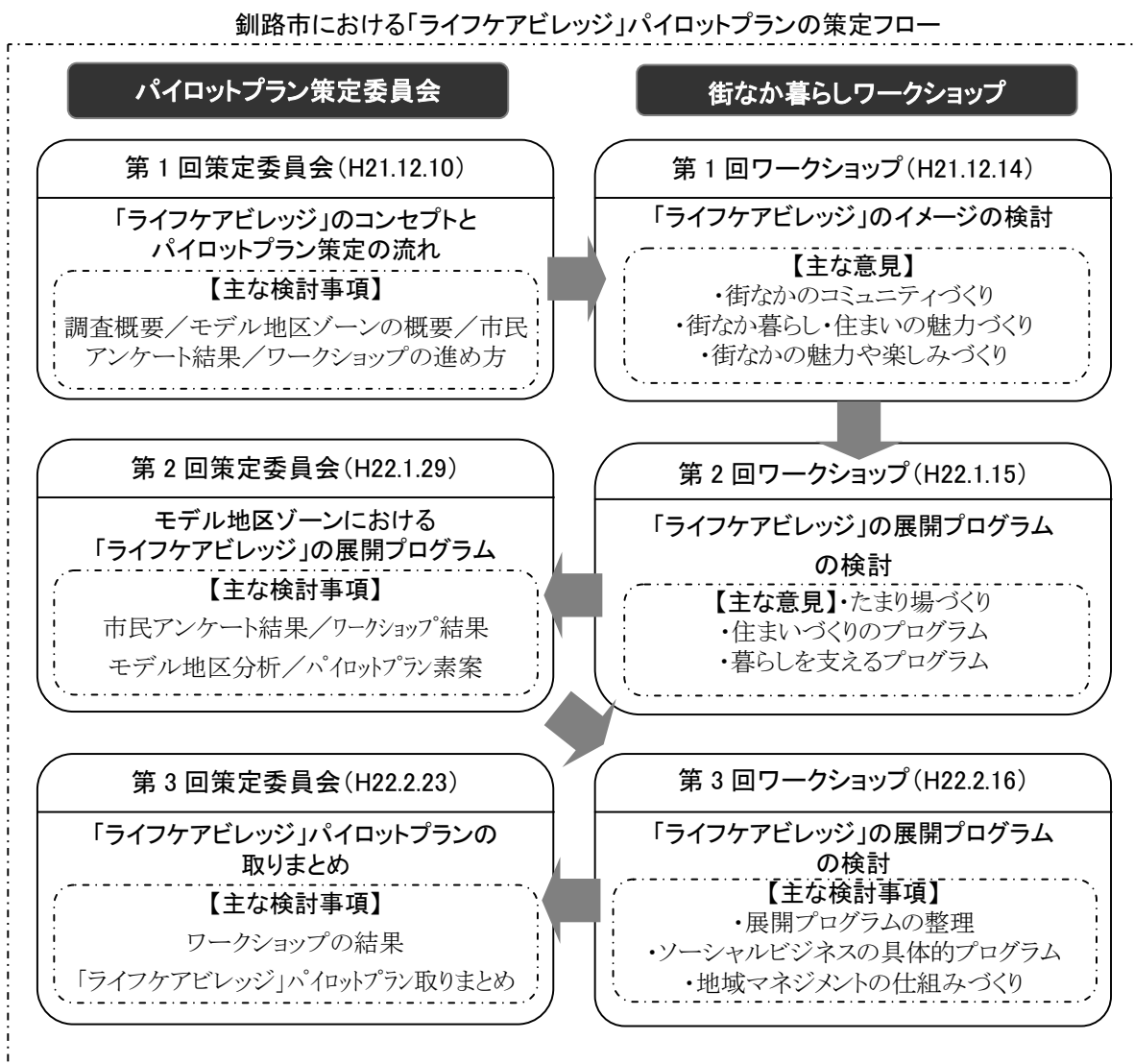
5. 釧路市における「ライフケアビレッジ」のパイロットプランの策定

(1) 策定フロー

釧路市における「ライフケアビレッジ」パイロットプランの策定は、市民協働によるものとし、釧路市内の金融・建築・福祉・不動産等の専門家によって構成される「パイロットプラン策定委員会」を設置した。

この策定委員会と連動して、モデル地区ゾーン住民・NPO・市民団体・起業者等が参加する「街なか暮らしワークショップ」を開催し、「ライフケアビレッジ」のイメージ、展開プログラム、パイロットプラン等について意見交換を行った結果をパイロットプランの取りまとめに反映した。

第1回策定委員会では、ワークショップの進め方等を検討した。ワークショップ開催後にとりまとめられた意見は、策定委員会において確認・検討し、パイロットプランにより多くの市民意見が反映されるように連動して開催した。その策定フローは以下の通りである。



(2)策定委員会の構成と主な意見

1)策定委員会の構成

策定委員会は、釧路市内の金融・建築・福祉・不動産等の専門家とモデル地区ゾーン内町内会の町内会長、行政委員(オブザーバー)で構成した。

釧路市「ライフケアビレッジ」パイロットプラン策定委員会の構成

氏名	所属	役職
一	大地みらい信用金庫起業家支援センター	センター長
金子 ゆかり	社団法人北海道建築士会釧路支部	情報委員長
岩 子	釧路地区障害老人を支える会	会長
小原 一	橋北東部地区連合町内会	会長
木村 豊年	くしろ長期滞在ビジネス研究会	代表
田中 一	北海道釧路支庁産業振興部建設指導課	課長

2)策定委員会における主な意見のまとめ

策定委員会における主要な意見を総括的に整理する。

■第1回策定委員会:「ライフケアビレッジ」のコンセプトとパイロットプラン策定の流れ

①「ライフケアビレッジ」の考え方

- ・街なかの楽しみ(日常の 食住や遊び・交流等)が味わえる、住民主体のまちづくり。
- ・多世代が 住し支え合う暮らし。
- ・多世代が一緒に利用し交流できるような複合型の住まいや場づくり。

②「ライフケアビレッジ」展開プログラムに関するニーズとソーシャルビジネスの育成と展開

- ・高齢者等がサポートを受けながら自立して暮らせる住まいが不足。
- ・郊外居住高齢者、広域圏住民等に新しい暮らし方を提案する形での企画推進が必要。
- ・新しい暮らし方を支える生活支援サービスについてソーシャルビジネスでの展開を検討。

③市民アンケート結果を踏まえた「ライフケアビレッジ」検討における課題

- ・安心な暮らしには、食べる・住む・医療・等が必要。小さな商圈・エリアである釧路で実現できるか。
- ・若い世代は街なかへの愛着が少ない。高齢者との意識の違いがある。街なかの魅力づくりが急務。
- ・モデル地区ゾーンに大都市圏二地域居住希望者を引きつけるには釧路らしい景観づくりが必要。



■第2回策定委員会:モデル地区ゾーンにおける「ライフケアビレッジ」の展開プログラム

①釧路市民アンケート調査結果を踏まえた「ライフケアビレッジ」の展開プログラム

- ・大都市圏の二地域居住希望者にむけて、釧路の自然の魅力をもっとプランに含めるべき。
- ・中心市街地に安価に暮らせる住まいづくり。人が住めば商店や医療施設はできてくる。
- ・広域圏住民の釧路市内拠点医療施設への通院等にむけた短期居住プログラムの展開。

②第1・2回ワークショップ結果を踏まえた「ライフケアビレッジ」展開プログラム

- ・「地域の縁側」実証実験結果やワークショップの意見からも「地域のたまり場」づくりは重要。
- ・多様な主体・団体の連携づくり、連携の場、人材ネットワークが必要。
- ・大なる自然と拠点医療施設を組み合わせた「自然体験」+「健康管理」+「食」プログラムの展開。
- ・居住者が地域コミュニティにとけ込みやすい仕組みづくり。

③「ライフケアビレッジ」パイロットプラン素案の検討

- ・「ライフケアビレッジ」づくりは、短期・中長期的・年次的に段階を分けて検討・実践することが必要。
- ・遊休資産の活用が重要なポイント。権利関係の整理や地権者理解の促進が必要。
- ・二地域・季節居住等について、夏季と冬季で住居・居室をシェアする展開は実現可能だと思う。
- ・地域居住再生ファンドは不況下ゆえ懸念あれど、重要な取り組み。金融手法(民事信託・立交換・リバースモーゲージ等)を入れることで画期的な取り組みになるかもしれない。
- ・災害時の安否確認の仕組みづくりが必要。



■第3回策定委員会:「ライフケアビレッジ」パイロットプランの取りまとめ

①「ライフケアビレッジ」の基本的な考え方

- ・高齢化率 30%を越えるモデル地区ゾーンで課題解決が実践できれば全国のモデルになる。
- ・元気な高齢者が自ら働く、若者が居住し活躍する が重要。
- ・先送りせず実践にむけて第一段階をスタートしてほしい。

②高齢者等の街なか暮らしを支える介護サービスとソーシャルビジネス

- ・様々な取り組みをどう維持し育てるかが課題。行動しようとしている人を支援する仕組みづくり。
- ・今後社会的課題解決にはソーシャルビジネスでの取り組みが増えてくる。その連携の場づくり。
- ・ソーシャルビジネスには経営としての自立性が必要であるが、一方で公的制度活用も必要。
- ・互助を越える部分においてソーシャルビジネス的な展開が重要。

③安心な住まいづくりのサポートシステム

- ・仕事とボランティアの境界、責任がどこまでかを整理する必要がある。
- ・道に乗り、資金の仕組みが定着するまで、まちづくりへの意気込みで集まってもらうことも必要。
- ・まずモデル地区ゾーン居住者のニーズをくみ取ることが必要。「ライフケアビレッジ」の種となる。
- ・空き家・空室の情報提供の場が必要。
- ・日本は今後成 社会に向かう。それに先駆けた行動が必要。

(3)「街なか暮らしワークショップ」の構成

1)「街なか暮らしワークショップ」の参加者構成

街なか暮らしワークショップは、モデル地区ゾーン住民・NPO・市民団体・起業者・行政等の団体から参加者を募り、延べ 27 人で意見交換を行った。

「街なか暮らしワークショップ」の参加者及びワークショップのグループ分け(順不同・敬称略)

グループ	氏名	所属	職
A	工藤 洋文	NPO法人わたぼうしの家	事務局長
	石川 佳世	NPO法人地域生活支援ネットワークサロン	
	丸尾 正志	多機能型グループホームかおり	施設長
	廣島 悠作	NPO法人くしろ・わっと	事務局長
	岩崎 菜津実	釧路公立大学	
	八幡 好洋	オイナモシリ株式会社	代表取締役
	西村 精啓	釧路市住宅都市部都市計画課 都市計画担当	課長補佐
	木村 圭	釧路市企画財政部企画課企画担当	主任
B	及川 悦子	川上親交町内会	副会長
	藤川 岳	障がい者支援施設おんべつ学園	課長
	及川	釧路地区障害老人を支える会(たんぼぼの会)	副会長
	吉田 万里子	NPO法人地域生活支援ネットワークサロン	
	高橋 正明	月曜塾	代表
	大谷 英治	北大通都心部青年会	会長
	相原 真樹	釧路社会起業プロジェクト	代表
	伊藤 里加子	関西大学2年	
	河面 真平	釧路市経済部商業労政課 商業振興担当	主事
	金徳 裕治	釧路市住宅都市部住宅課 住宅担当	課長補佐
C	波田地 昭彦	地域民生委員	
	内田 祥二	NPO法人地域生活支援ネットワークサロン	事務局
	熊谷	NPO法人地域生活支援ネットワークサロン	
	栗山 エリ	NPO法人地域生活支援ネットワークサロン	
	森 明美	釧路地区障害老人を支える会(たんぼぼの会)	事務局 電話相談員
	本間 善博	釧路商工会議所	振興部次長
	小林 友幸	NPO法人くしろ・わっと	理事長
	井上 真二	釧路市福祉部介護高齢者福祉課 介護保険担当	課長補佐
	小笠原 希	釧路市企画財政部企画課企画担当	主査

2)「街なか暮らしワークショップ」の開催概要

①第1回ワークショップ

i)当日のプログラム

<p>1 開会あいさつ</p> <p>オリエンテーション</p> <p>①「ライフケアビレッジ」の展開方策調査について(確認)</p> <p>②「ライフケアビレッジ」のモデル地区と展開イメージについて</p> <p>③市民アンケート調査結果の報告と分析について</p> <p>④街なか暮らしワークショップの進め方について</p> <p>⑤グループワークの進め方について</p> <p>グループワーク</p> <p>①グループワーク「モデル地区におけるライフケアビレッジのイメージを検討する」</p> <p>②意見の取りまとめ・発表準備</p> <p>グループごとの発表</p> <p>本日のまとめ</p> <p>その他(日程確認等)</p> <p>閉会・解散</p>

ii)当日の様子

<p>1. 開会あいさつ</p>  <p>開会挨拶(釧路市企画財政部企画課藤澤課長)</p>	<p>2. オリエンテーション</p>  <p>事務局より当日のプログラムと資料説明を実施</p>	<p>3. グループワーク</p>  <p>3 グループに分かれてワークショップを実施</p>
<p>3. グループワーク</p>  <p>グループワークのまとめの様子</p>	<p>4. グループごとの発表</p>  <p>各グループごとに発表を実施し、全員で意見を共有</p>	<p>5. 各グループのまとめの例</p>  <p>グループワークのまとめ(模造紙)の例</p>

②第2回ワークショップ

i)当日のプログラム

<p>1 開会あいさつ</p> <p>第1回ワークショップの振り返り</p> <p>オリエンテーション</p> <p>①アンケート、ヒアリング調査の結果報告</p> <p>②モデル地区の分析について</p> <p>③「ライフケアビレッジ」パイロットプランの構成イメージについて</p> <p>「ライフケアビレッジ」の展開プログラムについて</p> <p>グループワーク</p> <p>①グループワーク:「ライフケアビレッジ」の展開プログラムを検討する</p> <p>②意見の取りまとめ・発表準備</p> <p>グループごとの発表</p> <p>本日のまとめ</p> <p>その他(日程確認等)</p> <p>閉会・解散</p>

ii)当日の様子

<p>1. 開会あいさつ</p> 	<p>2. オリエンテーション</p> 	<p>3. グループワーク</p> 
<p>開会挨拶（釧路市企画財政部企画課岡本課長補佐）</p>	<p>事務局より当日のプログラムと資料説明を実施</p>	<p>3 グループに分かれてワークショップを実施</p>
<p>3. グループワーク</p> 	<p>4. グループごとの発表</p> 	<p>5. 各グループのまとめの例</p> 
<p>グループワークのまとめの様子</p>	<p>各グループごとに参加者から発表を実施し全員で意見を共有</p>	<p>グループワークのまとめの模造紙の例</p>

③第3回ワークショップ

i)当日のプログラム

1 開会あいさつ
全体ワークショップ
①第1・2回「街なか暮らしワークショップ」の意見の確認
②「ライフケアビレッジ」パイロットプランの構成案と全体像の検討
③「ライフケアビレッジ」の展開プログラムの検討
④ソーシャルビジネスの具体的プログラムの検討
⑤地域マネジメントの仕組みづくりの検討
まとめ
その他
閉会・解散

ii)当日の様子

<p>1. 開会あいさつ</p> 	<p>2. 全体ワークショップ</p> 	<p>2. 全体ワークショップ</p> 
<p>開会挨拶（事務局）</p>	<p>各資料を用いて説明を実施し、全体で意見交換・質疑応答を実施した</p>	<p>全体で意見交換・質疑応答を実施</p>
<p>2. 全体ワークショップ</p> 	<p>3. まとめ</p> 	<p>5. 閉会の挨拶</p> 
<p>出された意見は事務局が模造紙に記録を実施</p>	<p>事務局が記録した模造紙</p>	<p>閉会挨拶（釧路市企画財政部企画課藤澤課長）</p>

6. 「地域の縁側づくり事業」に関わる実証実験の実施

(1) 事業概要

市民協働による安心な街なか居住を実現する上で、「暮らし・住まいに関する相談ができる窓口・仕組み」、「介護・健康づくりの場所・支援の仕組み」、「住民が気軽に集まり会話・交流ができる場所」が必要と考えられる。そうした空間を実際に設定する際の課題や市民のニーズ・意見等を把握するための社会実験として、釧路フィッシャーマンズワーフ MOO の 2 階観光交流コーナーを活用し、平成 21 年 12 月 10 日(木)から1か月間、「地域の縁側」社会実験事業を実施した。1か月間の来場者数は約 2,000 名で、このうち 227 名からアンケート調査の回答を得た。また、「地域の縁側」の運営やイベントに参加した市民団体等へのヒアリングを行った。

(2) 実験結果のまとめ

・来場者アンケート調査で「中心市街地への居住に関心がある」と回答した人は 64.0%、「二地域・季節居住に関心がある」と回答した人も 37.6%となっており、いずれも市民アンケート調査の数値を大きく上回っている。

「地域の縁側」来場者は、街なかで過ごしたり活動する機会の多い市民層が中心であり、**街なかとの関わりが多い市民層では、中心市街地への居住に対して積極的な意向である。**

・「地域の縁側」が中心市街地の安心・安全な暮らしに「役立つと思う」と回答した人は 86.1%(来場者アンケート)。
・来場者アンケートの自由記述、「地域の縁側」参加市民団体ヒアリング調査でも、「常設で開設してほしい」という要望や意見が多く寄せられた。

街なかでの暮らしにおける「地域の縁側」の重要性が確認された。

・「地域の縁側」に望む機能としては、来場者アンケートでは「地産地消の食提供の場」(48.9%)、「同世代・同趣味の人との交流の場」(33.9%)、「近隣住民との交流の場」(27.3%)、「中心市街地の暮らしに関する情報提供と相談窓口」(27.3%)が上位に挙げられた(来場者アンケート)。

「都市住民の二地域居住・季節居住に関するアンケート調査」において、大都市圏住民が二地域・季節居住を行う地域に望む機能の上位とほぼ合致。**市民と大都市圏住民が「地域の縁側」に望むニーズは共通している。**

・来場者アンケート自由記述、参加市民団体へのヒアリングで「多様な立場の人々が気軽に立ち寄ることができて様々な相談をすることができる相談窓口機能が重要」という意見が多く出された。

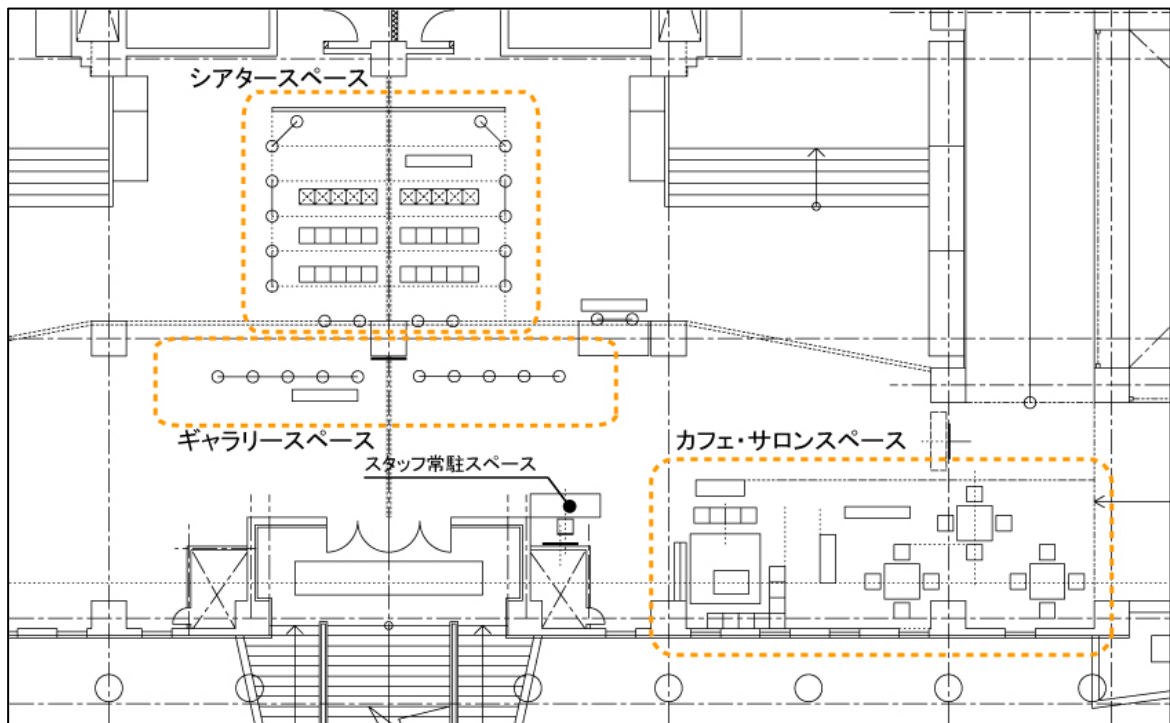


様々な相談に対応できるコーディネーターの養成や関係機関の連携ネットワークも含め、「地域の縁側」の相談窓口機能を充実することが街なか暮らしを支援・促進する上で重要である。

(3)実施概要

1)実施場所: 釧路フィッシャーマンズワーフ MOO2 階観光交流コーナー

「地域の縁側」配置図



2)開催期間

・平成 21 年 12 月 10 日(木)～平成 22 年 1 月 11 日(月・) *元 日は休館

3)実施内容

- ・ 設カフェ・サロンスペース、ギャラリースペース、シアタースペースを設置。
- ・(社)北海道建築士会釧路支部をはじめとする市民団体等により、住宅・健康・介護支援に関する相談会や映画会、パネル展等のイベントを実施。
- ・会場に隣接する喫茶店事業者の協力によりカフェサービス(有料)を提供。
- ・来場者向けアンケートの実施。
- ・ライフケアビレッジに関するパネルの展示。

4) 運営関係者

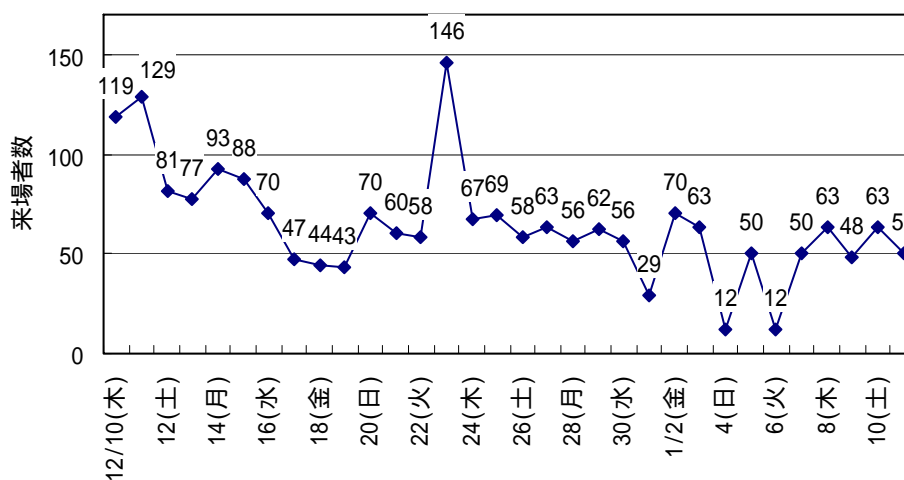
- ・全体企画・統括 : (株)ノーザンクロス
- ・現地事務局・会場管理 : (社)北海道建築士会釧路支部
- ・カフェサービス提供 : BAY CAFE
- ・施設運営者 : (株)釧路河畔開発公社

5) 広報

- ・市内の公共施設 27 箇所へのチラシ設置。
- ・釧路市政記者クラブへのプレスリリース(結果、下記の記事が掲載)
 - 北海道新聞 平成 21 年 12 月 4 日(金)付 夕 地方面
 - 釧路新聞 平成 21 年 12 月 6 日(日)付 朝 1 面
 - 北海道新聞 平成 21 年 12 月 11 日(金)付 朝 地方面
- ・広報くしろ 12 月号、1 月号に掲載。

6) 来場者数

- ・イベントへの参加者と、パネル等の展示 のために足を止めた人をカウントした(通過のみの人数はカウントせず)。
- ・計 2,066 名、1 日平均約 65 名が来場した(通過のみの人数は 記のおおよそ約 0.5 倍)。
- ・来場者が最も多かったのは「X mas 特別企画」を実施した 12/23(水)の 146 名、逆にもっとも少なかったのは、1/4(日)、6(火)であった。



(4) 実施風景



開始前日の会場設営



トワイライトシアター



健康よろず相談



NPO 法人ナルク釧路介護支援活動パネル展



折り紙建築体験



クリスマスミニコンサート



NPO&アースデイ出張相談会



カフェ・サロンスペースでくつろぐ来場者

(5) 来場者アンケート調査

1) 調査概要

■調査方法:

「地域の縁側」来場者に対し、会場管理スタッフが調査票を手渡し、自己記入または聞き取りにて調査を実施した。

■サンプル数:227名

2) 調査結果

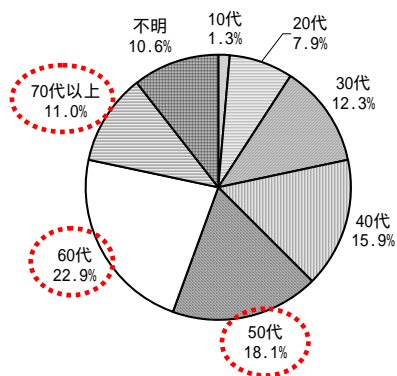
■回答者の属性

60代が最も多く22.9%であった。また、50代以上が過半数を占めている。男女比はほぼ同数であった。

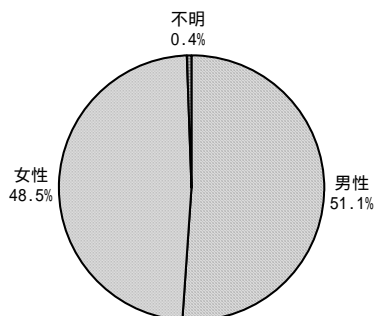
会社員と無職者、主婦が約2割とほぼ同数。会社員は近隣に勤める方、無職者は「地域の縁側」と同階にハローワーク釧路があることから、その利用者もいると考えられる。

居住地域は橋南、愛国、採の順で近隣地区が多い。これらで半数を超えている。

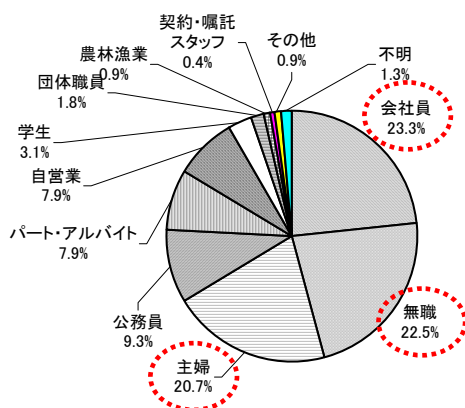
年代 <SA> (N = 227)



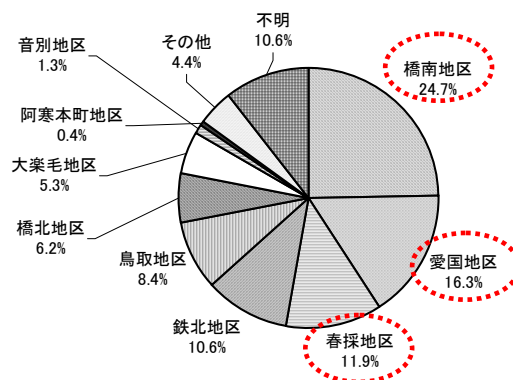
性別 <SA> (N = 227)



年代 <SA> (N=227)

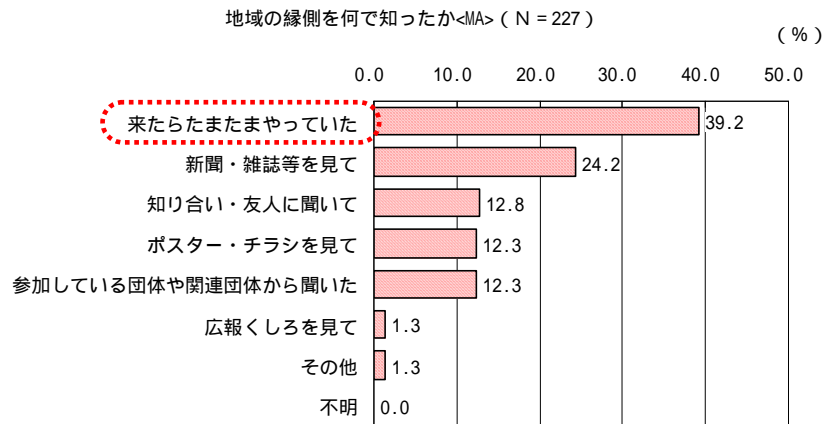


居住地域 <SA> (N=227)



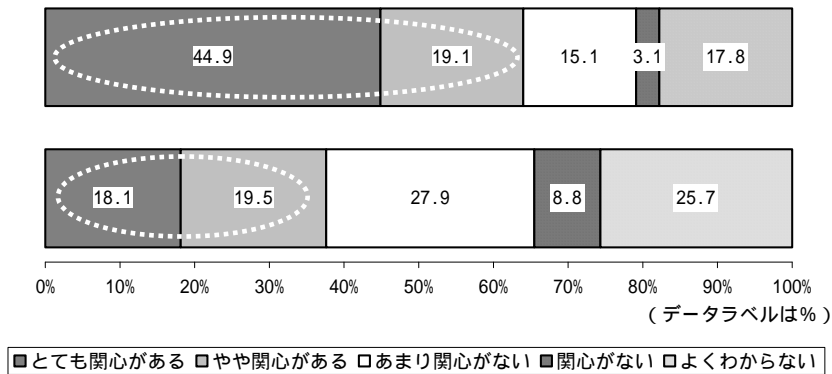
■ 知ったきっかけ

「来たらたまたまやっていた」が最も多く約4割であった。



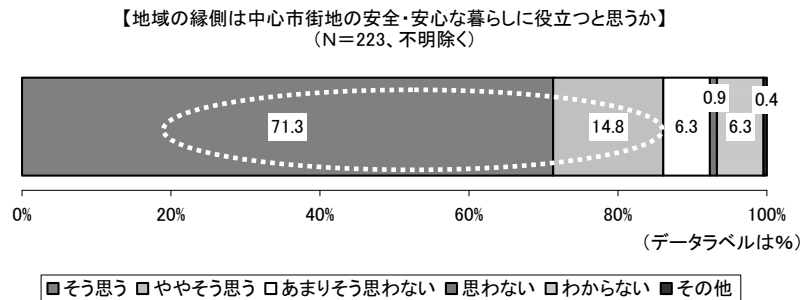
■ 街なか居住、二地域・季節居住への関心

回答者の60%以上が中心市街地居住に「関心あり」と回答。二地域・季節居住についても「関心あり」が37.6%で「関心がない」(36.7%)をやや上回っている。



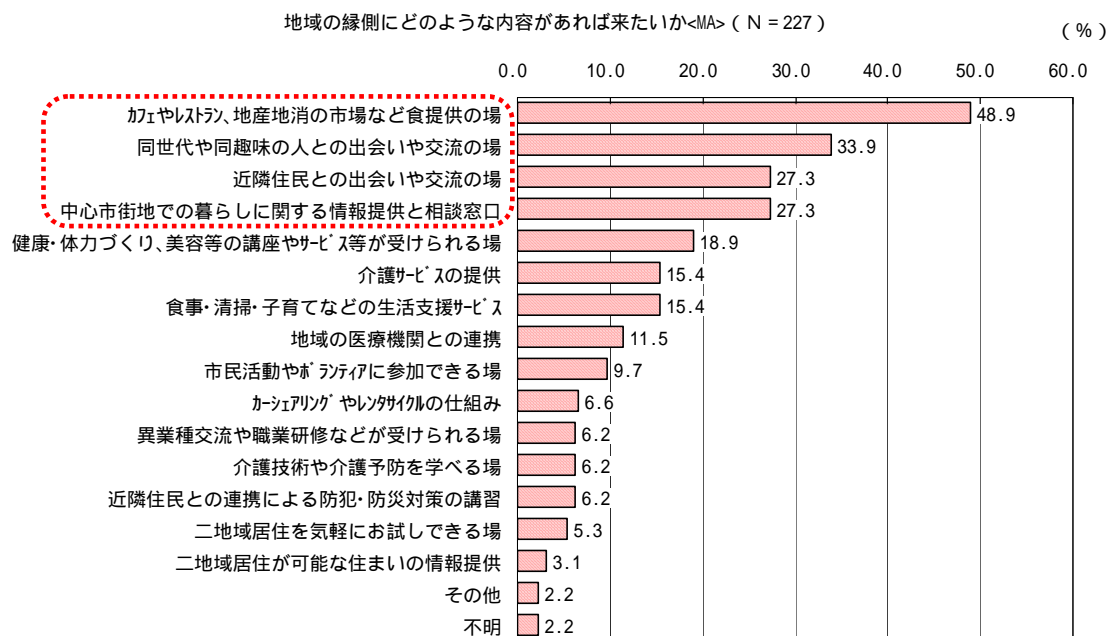
■ 地域の縁側は中心市街地の安全・安心な暮らしに役立つと思うか

回答者の80%以上が地域の縁側を中心市街地の安全・安心な暮らしに「役立つと思う」と回答。



■地域の縁側にあれば来たいと思うもの

「食提供の場」が最も多く、約半数が回答した。以下、「同世代や同趣味の人との出会いや交流の場」が2番目に多く、「近隣住民との出会いや交流の場」「情報提供と相談窓口」がともに27.3%で3番目に多い。



■自由記述より

○「地域の縁側」に関する意見やアイデア:

- ・期間限定ではなく常設で／他の場所でも、開催してほしい。(同様7件)
- ・MOOへは時々来ますが、数人集まっているお年寄りから、一人暮らしなので家に居てもさみしいとの声をにします。老若男女が色々な事を通じて関われる場になると、さみしい老人が減り、釧路の活性化にもつながると思います。(30代女性)
- ・(このような場は)コーディネーターが大事だと思います。(30代女性)

○情報発信・相談に関して:

- ・生活での色々な不安(身体が不自由になった時等)を相談する機関がわからない。ここに来たら色々な情報があり、不安を解消できれば良い。(70代女性)
- ・学生は昼間は学校へ行っているので地域社会から離れてしまいがちなので、学生向けのチラシや定期的な新聞でボランティア活動のお知らせ等を広報してもらえると嬉しいです。参加してみたい学生は意外と多いはずです!(10代男性)

○イベントに関する意見やアイデア:

- ・美味なものがたくさんある釧路なのでそれを生かしたイベントをしては?

(6)参加市民団体ヒアリング調査

1)調査概要

■調査方法:

実験に参加し「地域の縁側」にて活動を実施した市民団体の担当者に対し、社会実験終了後にヒアリングを行い、実施者の立場からの社会実験に対する評価、課題等を抽出した。

■ヒアリング先:

(社)北海道建築士会釧路支部、くしろ橋南西ゆめこい倶楽部、NPO 法人ナルク釧路、釧路市東部北地域包括支援センター、NPO 法人くしろ・わっと(釧路市民活動センター)、NPO 法人在宅支援技術者連絡協議会

2)調査結果

(社)北海道建築士会釧路支部、くしろ橋南西ゆめこい倶楽部(※メンバー重複にて同時ヒアリング)

■ヒアリング先:女性委員長(くしろ橋南西ゆめこい倶楽部 事務局長)、青年委員長、事務局スタッフ
(縁側現地スタッフ)

■日時:平成 22 年 1 月 11 日(月・)15:00~16:45

1.「地域の縁側」に関わって(現地事務局として、イベント実施者として):

(1)参加した感想

- ・いろいろな人が来て、いろんな話が聞けて楽しかった。お話をするのは主に高齢の方で、アンケートをおいするのをきっかけにいろんな話をするようになった。
- ・高齢者は映画目当てで来る人も多く、自分で DVD を借りて観るといことはしない人などは気軽に観られるのが良かったようだ。
- ・「常連さん」もできた。単身で住んでいて普段一人きりで過ごしている高齢者が多い。
- ・「常連さん」には自習をしに来ている学生もいた。バス通学の帰宅途中に寄りやすく便利(バス一本で来られる)、図書館等とは違って飲食しながら自習ができることが良いとのこと。
- ・周辺で働いている人がふらっと立ち寄ることもあり、寒い時期に特定の人がいまり場として利用している印象を受けた。MOOを訪れる一般市民、テナントの方などの率直な意見も聞くことができた。

(2)今回、工夫したこと

- ・参加団体が少ないので自前のイベントを試みた。もう少し PR できる時間があれば良かったのかもしれないがデータにも現れているとおり「クリスマス特別企画」には、今回の事業ではもっとも多い集客があった。同じような企画をあと 1~2 回できる余力があれば良かった。

(3) 貴団体としての手ごたえ・効果

- ・大変勉強になったとは感じている。事務局員が常駐する事で人が新たに構築された事は大きいと感じている。
- ・地域の縁側としての役割を「大切だ」と考えるきっかけを与える事はできたのではないかと思う。

(4) 困ったこと・課題

- ・期間が限定されていた事で定着する前に終了してしまった印象がある。
- ・年 年始の忙しい時期にイベントを組むのは無理があった。出来る限りの団体に参加を呼びかけた
が、この期間でなければとの回答が多く 常に残念だった。
- ・時間の関係もあり、実験事業の事務局、参加市民団体、施設管理者等との意思の疎通が上手く行
かなかったように感じている。
- ・ち っとした空き時間に気軽に寄れるように考えるなら、MOO ではなくバス 前の空き店舗などを利
用した方が効果は上がったのではないかと感じる。

2. 「地域の縁側」の設置趣旨に関する、今回の評価、今後についてのアイデア・ご意見：

(1) 趣旨1：暮らし・住まい・その他に関する相談窓口・情報発信の場として

- ・住まいや介護に関する相談を受けることもあり、今回は全ての相談にその場で回答できなかったた
め「調べておからまた来て下さい」という対応をしたが、本格実施に向けて相談対応体制を検討す
る必要がある。
- ・介護については、今はまだ元気だが、体が不自由になったときに必要な情報を元気うちに調べて
おきたいというニーズがある。
- ・相談窓口としては市役所もあるが、市役所は敷居が高い、どこに行けばよいかわからない、というこ
ととで行きづらいという意見があった。
- ・必要なのは「相談する前の段階」の場所。この相談はどこに行けばよいのかを教えてくれる場所だと
考える。そのような場所はお年寄り以外の世代にとっても使いやすい。そのためには、例えば観光
の相談にきた観光客に MOO の観光交流コーナー常駐スタッフに対応してもらったが、相談窓口間
の連携が必要である。
- ・今回「イベント」として 時的に相談窓口が設けられたが、1ヶ月に1回でもよいので定期的に決まっ
た日にあることが大切。
- ・そこに行けば「相談できる」「情報を得られる」「誰かが居て話ができる」という 安心感 のようなものが
縁側にはあったように思う。
- ・釧路の事情を考えると「縁側」のような場所は必要だと感じる。デパートがあった時には無料で楽し
める場所として高齢者なども通っていたようだが、それがなくなったと同時に中心市街地での居場
所が消 してしまった。誰もが気軽に入れる、休める場所が今の釧路には不足している。
- ・相談窓口となると専門知識が必要になるので、全てに対しては不可能。理想を言えば曜日別に相
談できる内容が異なれば良いのだろうが「ここに連絡すればわかるはず」というように紹介するだけ
でも有効かと思う。コーディネータ 的な人が常駐できれば良いのかもしれない。

(2)趣旨2:介護・健康づくりの場所・支援の仕組みとして

- ・今回の実験事業は、期間が短く十分に情報が しまなかった面はあるが、定期的に専門の団体などが窓口を設け定着できれば、仕組みとして成り立つと考える。
- ・サークルなど特定の団体も使用できると良いのかもしれない。 ガなどをやっているのを見ると一緒にやりたくなり仲間の輪が広がる可能性もある。
- ・定期的に健康的な食事を取れるようにデモンストレーションと試食の会などを行う事で啓発を行ってはどうか。
- ・介護の情報を発信できるように市内・管内の施設資料は常備しておく必要がある。

(3)趣旨3:会話・交流の場として

- ・今回の実験事業では MOO の利用者が立ち寄るのが 倒的に多かったが、不特定多数の人に来場してもらうにはバス 前の空き店舗などの活用が望ましい。
- ・自由に出入りできる為には、あまり囲われた空間ではない方が良い。カーテン程度でも「ここは入ってもいいんですか？」と聞かれた事もある。
- ・期間を限定しないで、団体・サークルなどにイベントを組んで自由に使ってもらえる事ができれば広がりが出る。MOO のような商業施設がある場合はイベント終了後に買物をする事もできればテナントにもメリットがある。

3.「地域の縁側」の継続について

(1)そもそも「地域の縁側」はあった方が良くか

- ・あった方が良く。「地域の縁側を1ヶ月しかしないのは残念」との声をよく聞いた。
- ・地域の活性化のためにも必要。また、高齢者や弱者などが利用しやすい環境としても重要。無職の人たちの仕事の情報交換の場所としても使用できるかもしれない。

(2)どんな場所が良いか

- ・「地域の縁側」を設けるならバス の近くが良い。「バス待ちの間、ちょっと休んでいきませんか」と声をかけられる。
- ・NPO 法人わたぼうしの家の地域食堂も週に1回だが定期的に開催しており、行きやすい雰囲気である。
- ・「釧路市民活動センターわっと」もあるが、あそこは「市民活動」や「会合」といった目的があって行く施設。ふらっと、何も用事がなくても立ち寄られる、居られることが「縁側」には大切。
- ・場所的には「居られる」「休める」ためには 地や奥まった場所の方が良い。しかし、通りかかった人に声をかけられることを考えると今回のような通路の途中も良い。
- ・釧路市内各地にはコミュニティセンターがあるが、そのような場所が中心市街地にあっても良いのではないか。
- ・中心市街地の路面から直接アクセスできる場所。バス の前など。誰でも入れ活用できる場所として、ある程度のスペースが必要。
- ・今回もベイクカフェさんの協力はあったが、できればフードメニューもあり飲食できればよい。例えばベーカリーとカフェが一緒にあるのが良いと思う。

(3) 運営の仕組み・担い手

- ・自分が住むのは高齢者が多い緑ヶ岡地区。自分が話し好きで、普段から近所のお年寄りに声をかけていたことが、今回にもつながったと思う。
- ・「NPO 法人地域生活支援ネットワークサロン」では「地域の縁側」的な場として「エプロンおばさんの店」を開設しているが、無料ではない。一つの団体でやろうとするとお金を取らないとやっていけないので、複数団体による共同運営が良いのではないかと。
- ・事務局スタッフは誰か決まっていた方が良い。「あの人に言っておいたけどどうなった？」ということがないようにしなければならない。
- ・全面的にボランティアというのでは長続きしないように感じる。施設を管理する人がカフェの経営者であったりなど、商売で関わる人が担い手となることも一つではないかと。
- ・高齢者をスタッフとしての仕組みづくりを考えてはどうか。元気な有能な高齢者は沢山いる。先にもう一度活躍してもらおう事で高齢者全体の元気の 上げを目指す。

(4) 地域の縁側にあるべき／あった方が良いもの・こと・人

- ・休んでよい場所があり「休んでいいよ」と言ってくれる人がいることが良いようだ。「何でもよいので声をかける」ことが大切。
- ・子どもの対応では、り や落書き帳を用意した。子どもが遊んでいる間に、母親は手を離し、別のことができるということも大切。
- ・誰かと「話したい」「聞いて しい」「一緒にいたい」という人たちは多く存在している。ここに行けば誰かいると分るだけでも「安心」を提供できる。まず第一に「人」が必要。
- ・大きな やちゃぶ台。沢山の人が集える場所であつたら良いのかもしれない。知らない人と相席になる事で、人と人とのつながりが出来るのも魅力ではないかと。
- ・基本的な使用ルールはあっても、あまり型にはめないで利用できるようにすると、多くの人が利用してくれる。食べ物・飲物・ここにしかないものがあると人は集まりやすくなる。

(5) 実施・継続の課題

- ・「縁側」は、期間限定はそぐわない。「関係を築く」趣旨からも継続しなければならない。
- ・「広報」も継続していれば口コミで広まるので必須ではない。むしろ「広報して知らせる」というのはそぐわない。
- ・本来「縁側」は、行政が用意するものではなく自然発生的に出来るものなのかもしれない。安心して利用してもらうには「いつもある」「いつもいる」という事が必要である。
- ・開かれた使い方ができるようになれば、イベントなどを行う団体が自分で周知する。商店は「いつもそこにある」ので PR しなくてもみんな「ある」という認識の元に買い物に出かける。それくらい するのには時間がかかるだろうが、誰もが「縁側」が「いつもあるもの」と認識できるようになって初めて、本来の意味で機能していると言える気がする。

NPO 法人ナルク釧路

■ヒアリング先:NPO 法人ナルク釧路代表

■日時:平成 22 年 1 月 27 日(水)18:35~19:35

1. 「地域の縁側」にて貴団体で実施したイベント・取り組みについて:

(1)参加した感想

・当法人の広報につながると思い参加した。

(2)今回、工夫したこと

・パネル展を開催するのは初めてだったので、展示物を何にするかなど、いろいろと試行錯誤をした。

(3)貴団体としての手ごたえ・効果

・当法人の PR に多少はなったと思う。

・1 日に 1~2 件程度の相談があったが「ナルクでは何をしているのか」くらいの質問で、突っ込んだ相談はなかった。

(4)困ったこと・課題

・MOO の駐車場料金が高かったこと。30 分 100 円は高い。

2. 「地域の縁側」の設置趣旨に関する、今回の評価、今後についてのアイデア・ご意見:

(1)趣旨1:暮らし・住まい・その他に関する相談窓口・情報発信の場として

(2)趣旨2:介護・健康づくりの場所・支援の仕組みとして

(3)趣旨3:会話・交流の場として

・各テーマ設定が重く、また、ばらばらだという印象を持った。

・「地域の縁側」とは何かをシンプルに分かりやすく伝える工夫が必要

・そもそも今の世代は「縁側」を知らない。そういった人にも伝わるものでなければならない。

・スペースもテーマ別に分けた方が良かったのではないかな。

3. 「地域の縁側」の継続について

(1)そもそも「地域の縁側」はあった方が良いか

・あった方が良い。

(2)どんな場所が良いか

・「わっと」の裏にある旧・井今井の 1 階のような場所の方が中心市街地活性化のためには良い。ただし、北大通から誘導する看板を設置する必要がある。

・よそいきではなく誰でも集まれるような場所、通り抜けの途中にあるような場所が良い。

(3)運営の仕組み・担い手

・今回、「参加団体が一堂に会して話し合う」ような盛り上げ方もあったのではないかな。

・釧路市では、他の取り組みについても上記のようなことがあまりないように思う。そのような気配りが

大切である。

- ・官が入った取り組みは「当初の企画」の中だけでやろうとしがちであるが「当初の企画」からはみ出すようなことをしなければ面白くない。

(4)地域の縁側にあるべき／あった方がよいもの・こと・人

- ・MOO 内の店舗や施設、管理者など、関係者の気持ちがばらばらであるように感じる。建物に関わる人同士がサポートし合うような気持ち、交流が大切。
- ・どのような取り組みでも連携が大切。イベントにしても「連携イベント」の方が面白みがあるので、メディアにも取り上げられやすい。

(5)実施・継続の課題

- ・例えば、ストリートで音楽をしている若者がやってきて「ここで演奏してもいいよ」と言ってもらえるような場所ではなければならない。
- ・多様な世代、多様な人が自分の得意なことを、うるさく言われずにできる。それをお互いに見て「なかなかやるな」と認識し合える。そんな 容な雰囲気大切。

4. 「ライフケアビレッジ」について:

(1)「展開プログラム」に関するアイデア・ご意見

- ・「地域の縁側」、すなわち「文化」そのものである。釧路の場合は漁業、
、パルプ等の産業が合わさって文化を形作ってきた。その文化から離れては「縁側」は有り得ない。
- ・これまで中心的な「縁側＝文化」は北大通にあったが、それが今は移動してしまった。それを「戻す」のはとても難しいのではないか。
- ・「戻す」ためには人をたくさん住ませること、すなわち、共同住宅の整備が必要である。
- ・共同住宅の話は以前もあったが、そのときも「高齢者用住宅」という話だった。しかし、お年寄りや若者、いろいろな人がいてこそ「まち」である。
- ・狭い地域に4つの商店街があるようなばらばらな気持ちでは活性化は難しい。また、商店主が住まなくなったことも要 である。商店主が自宅に帰って6時になればシャッターが閉まってしまうようなまち、花火を見終わると開いているお店がないような場所に誰が行きたいと思うだろうか。
- ・「街並み」よりもまず「人並み」を良くする取り組みを考えるべき。「人並み」が良くなれば自然に街並みも良くなる。

5. 都心部でのソーシャルビジネスについて:

(1)貴団体による SB の今後の展開や希望

- ・アイデアであるが、シニア団体やグループホーム等を組織化し、そこの高齢者の方に、雑 店等に
すことができる「商品」を作っていただくということを考えている。例えばお針子やパッチワークなど。
いわば、授産製品の高齢者 である。
- ・認知症や体調の悪い方もいらっしゃるので、自分の好きなときに、作りたいものを、好きなだけ作っていただく。
- ・利益は小額かもしれないが、作った方に還元することで「生産することの喜び」、働く意 が生まれ、
活性化するのではないか。

◆釧路市東部北地域包括支援センター

■ヒアリング先:看護師

■日時:平成 22 年 1 月 27 日(水)13:55~14:35

1.「地域の縁側」にて貴団体で実施したイベント・取り組みについて:

(1)参加した感想

- ・来場者数が少なかったのが残念だった。
- ・企画を知って来場された方は少なく、ハローワークなどへの通行途中で声をかけて寄っていただいた方がほとんどだった。

(2)今回、工夫したこと

- ・気軽に立ち寄っていただけるよう、 計を用意した。
- ・様々な内容の相談に対応できるよう専門職を配置した。

(3)貴団体としての手ごたえ・効果

- ・効果は低かった。
- ・もともと集まっている方々がいるという情報を得られたのはよかった。川を った当センターの担当地域から集まっている人もいた。男性が集まる場所というのは珍しい。

(4)困ったこと・課題

- ・当センターを利用している方以外にはあまり知られていないので「人を呼ぶ力」としては弱かったと思う。
- ・来場者の多い催し日に相談を実施させていただけるとありがたい。

2.「地域の縁側」の設置趣旨に関する、今回の評価、今後についてのアイデア・ご意見:

(1)趣旨1:暮らし・住まい・その他に関する相談窓口・情報発信の場として

(2)趣旨2:介護・健康づくりの場所・支援の仕組みとして

- ・いろいろな制度を知っていただくためにできるだけ多く地域の方と れあう場に出向きたいと思っている。

(3)趣旨3:会話・交流の場として

- ・趣旨としては良かったのではないかな。
- ・期間限定ではなく、地域の人たちがなんとなく足を運べる場が常にあると良いと思う。

(4)今回の課題

- ・MOO2 階という場所設定は、大きい建物だということもあり、分かりにくかったのではないかな。
- ・より多くの方に利用していただけるよう PR に力を入れる。
- ・高齢者ほど中心市街地衰退への危機感が強いので、町内会の回 などで PR すればもっと人が来たかもしれない。
- ・参加当日、MOO で昼食をとったが、そのお店の方が企画をご存知なく残念だった。

3. 「地域の縁側」の継続について

(1) そもそも「地域の縁側」はあった方が良いか

- ・「元気な高齢者」が集まる場所として、あった方が良い。
- ・「気軽に行ける・集える場所」があることは介護予防にもなる。
- ・包括支援センターとしては「介護なんてまだ早い！」「そんなことはまだ聞きたくない」と考えている人とコンタクトできる場所としてあってほしい。当センターは介護を必要としている人は来るが、そうではない人は来ない。
- ・「目的」的に行くのではなく、何となく立ち寄れる場所であった方が、友だちと誘い合わせて行けたりするので良い。

(2) どんな場所が良いか

- ・「地域の縁側」参加日に国際交流センターでは物産展が開催されていたが、1階の一 に設けることができれば来場者数はもっと増やせたのではないかと。
- ・MOO と比べると、国際交流センター1階は端まで見通すことができる場所も良い。

(3) 運営の仕組み・担い手

- ・町内会や連合町内会にも共催者として PR 活動などの協力や運営などの意見を求めると良いと思う。

(4) 地域の縁側にあるべき／あった方がよいもの・こと・人

- ・法律相談や人生相談など、困りごとの相談窓口もあれば便利だと思う。
- ・MOO で出しているような観光客向けの食べ物ではなく、安価な大 向けの食事や軽食を出せば良い。

4. 「ライフケアビレッジ」について:

(1) 「展開プログラム」に関するアイデア・ご意見

- ・中心市街地は「元気な人」は行けるが「足 が不自由な人」は用事がなければ行かない場所であると思う。
- ・中心市街地の近くに住む人や仕事で通う人は例外だが、それ以外の人たちは官公庁以外の用事はたいてい他で済ませられる。
- ・気軽に使える無料駐車場ができない限り、車を使う人はあまり行かない。

◆NPO 法人くしろ・わっと(釧路市民活動センター)

■ヒアリング先:事務局長

■日時:平成 22 年 1 月 28 日(木)17:10~17:40

1. 「地域の縁側」にて貴団体で実施したイベント・取り組みについて:

(1)参加した感想

- ・来場者が少なかった。
- ・外部での相談受付は初めてだった。当会としても良い試行になった。来場者が少なかったことも、試行としてはプラスだったかもしれない。

(2)今回、工夫したこと

- ・パソコンを持ち込み、現場で相談内容をまとめて後日回答をす、という相談受付を行った。

(3)貴団体としての手ごたえ・効果

- ・わっと以外の場所でも相談受付をするという良い経験になった。

(4)困ったこと・課題

- ・相談ブースとしては、20 人以上の相談者が来たような場合の対応が課題である。

2. 「地域の縁側」の設置趣旨に関する、今回の評価、今後についてのアイデア・ご意見:

(1)趣旨1:暮らし・住まい・その他に関する相談窓口・情報発信の場として

(2)趣旨2:介護・健康づくりの場所・支援の仕組みとして

(3)趣旨3:会話・交流の場として

- ・参加当日は会場で別の団体による「介護リフォーム相談会」も行われていたが、複数種類の相談窓口があるのは、来場者にとって良かったのではないかと。
- ・当方としても、他のブースの方と意見交換できたことがよかった。

(4)今回の課題

- ・「縁側」という言葉を考えると、もっと来場しやすくなる宣伝をしたほうが良かったのでは。
- ・イベントと合わせて開催するなどするとより来場者は増えたのではないかと。

3. 「地域の縁側」の継続について

(1)そもそも「地域の縁側」はあった方が良いか

- ・あった方がよい。コミュニティ、交流の場が街なかには少ないので。
- ・わっとにも交流サロンがあり、カフェサービス(コーヒー、茶)も1 200 円で提供している。
- ・喫茶店などもあり得るが、ふらっとは入りづらい。自由に出入りできる公共の空間が良いのではないかと。
- ・「さいわい」や「まなぼっと」にも同様の機能はあるが「さいわい」は耐 診断により一次閉館中であり「まなぼっと」は都心から離れている。

(2)どんな場所が良いか

- ・空き店舗を活用する。
- ・モデル地区である旭町近辺だと、釧路市社会福祉協議会や旧旭小学校の近くが良いのではないかと。
- ・MOO はもともと人の流れがない施設なので不適と考える。

(3)運営の仕組み・担い手

- ・公共施設はさまざまな制限が出てくるので、NPO などが良いのではないかと。
- ・完全民営だと運営費の問題があるので、わっとのような公設民営もあり得る。

(4)地域の縁側にあるべき／あった方がよいもの・こと・人

- ・ち っとお茶を飲めるような場所。
- ・わっとはスタッフがサーブしているが、料金 を用意してセルフサービスにするなど、シンプルな仕組みが良いのでは。

(5)実施・継続の課題

- ・しっかりとした運営体制を作ること。
- ・もちろん、運営資金をどうしていくかも大きな課題としてある。

4.「ライフケアビレッジ」について:

(1)「展開プログラム」に関するアイデア・ご意見

- ・実現していくためにはしっかりとした組織が必要。
- ・明確なターゲット設定も必要ではないかと。

5. 都心部でのソーシャルビジネスについて:

(1)貴団体・他団体による SB の実績、参考にすべき事例

(2)貴団体による SB の今後の展開や希望

- ・コミュニティビジネスのアイデアはいろいろ出るが「誰が中心になってやるか」が最も 心なところである。また、「どこから手をつけるのか」も大切である。

◆NPO 法人 在宅支援技術者連絡協議会

■ヒアリング先:NPO 法人 在宅支援技術者連絡協議会

■日時:平成 22 年 1 月 27 日(水)17:15~17:45

1. 「地域の縁側」にて貴団体で実施したイベント・取り組みについて:

(1)参加した感想

・企画自体は良かったと思うが、来場者が少なかったのが問題。

(2)今回、工夫したこと

・リフォームの 明をするために実物の手すりを持ち込んだこと。

(3)貴団体としての手ごたえ・効果

・当法人は札幌本部なのだが、釧路支部としてアピールでき良かった。

・イベント参加の経験を積むことができた。

2. 「地域の縁側」の設置趣旨に関する、今回の評価、今後についてのアイデア・ご意見:

(1)趣旨1:暮らし・住まい・その他に関する相談窓口・情報発信の場として

(2)趣旨2:介護・健康づくりの場所・支援の仕組みとして

(3)趣旨3:会話・交流の場として

・趣旨としては良かったのではないかな。

3. 「地域の縁側」の継続について

(1)そもそも「地域の縁側」はあった方が良いか

・あった方が良い。

(2)どんな場所が良いか

・MOOは高齢者の住むところ、通うところから遠い。高齢者がターゲットならば病院や介護施設の近くなどが、ついでに寄れるので良いのではないかな。

・相談窓口としては、ゲリラ的にいろいろな場所でやるのも良いのではないかな。

(3)運営の仕組み・担い手

・時間がなかったのかもしれないが、事前に各団体が集まってスタッフ同士が交流するような取り組みがあれば連携できたかもしれない。

(4)地域の縁側にあるべき／あった方がよいもの・こと・人

・お茶の無料サービス。番茶程度でよいので。

(5)実施・継続の課題

・心なのは人＝マンパワー。継続するためには事務局となる人が必要。

・地元 FM 局との連携もあり得る。また、FM に紹介してもらえるとこのインセンティブがあれば、参加団体も増えるかもしれない。

- ・冬季の屋内実施だったので、フリーマーケット的なイベントを行っても良かったのではないかな。

4. 「ライフケアビレッジ」について:

(1) 「展開プログラム」に関するアイデア・ご意見

- ・都心に住む理由は世代によって違う。若者は買物できる場所が近いことになるだろうし、お年寄りも交流し助け合うこと、なのかもしれない。
- ・多世代を対象にするのなら、それぞれの世代に合ったアピールが必要ではないかな。

5. 都心部でのソーシャルビジネスについて:

(1) 貴団体・他団体による SB の実績、参考にすべき事例

- ・例えば、高齢者に代わって除雪をしてもらえるような 単な生活支援サービスが必要ではないかな。

第7章 まとめ

- ・本調査は、全国の地方都市の中心市街地の人口・産業の空洞化に伴う地域活力やコミュニティが停滞しその再生が喫緊の課題となるなか、既存のストックや都市機能等を有効に活用しながら、高齢者等が安心して暮らせる住まいづくり、二地域・季節居住等の新しい暮らしの創出、街なか暮らしを支えるソーシャルビジネスの育成を推進することにより、多様な人々が交流し、互いを支え合い、生き生きと暮らせるコミュニティの再生をめざした調査である。
- ・ここで、調査の全体像を概観するとともに、その結果から読み取れる課題や提案を整理する。

(1) 各種調査結果と二地域・季節居住を促進する上でのポイント

都市住民アンケート

(調査対象：首都圏・近畿圏の一般市、特別区、政令指定都市、中核市、特例市)に住む40歳以上の男女のモニターに対するWEB調査 1009票回収)

- ・「二地域・季節居住に関心がある」は46.0%で、男女では男性の方がやや関心が高い。
- ・その目的は「特定の季節をより快適なところで過ごしたい」(49.1%)で、その季節は「夏」が最も多く45.7%となっている。
- ・二地域居住の際の障壁・課題は、「新たな住居の家賃(購入費)など」が78.2%、次いで「現住居の維持・管理」47.0%となっており、住居費負担を節減することが課題となる。
- ・居住地域にあったら良いものは、「カフェやレストラン、地産地消を楽しめる市場など食提供の場」が45.3%、「二地域・季節居住を気軽にお試しできる場」44.6%、「地域の医療施設との連携」36.2%などが多い。
- ・居住する相手は「配偶者」(54.3%)が最も多く、次いで「自分一人」が18.0%である。
- ・必要とされるスペースは比較的広く、「居間+2部屋」、「居間+1部屋」が多い。トイレ、浴室、キッチンなどの水廻りは全て専用のものが求められており、家具や家電、インターネット環境も求められている。プライベートな空間の充実が求められていると考えられる。
- ・「賃貸住宅(一戸建て)」、「分譲マンション」、「短期居住型住宅」の順である。

【モデル都市(釧路市)を想定した設問】

- ・「釧路市に二地域居住してみたい」は12.4%で、その季節は「夏」が84.7%。
- ・滞在期間は1ヶ月程度が34.1%で最も多く、その滞在費用(往復の交通費は除く)は10万円未満が31.6%。このことから、1日あたりの滞在費用が5千円以下でまかなえるようにすることが必要と考えられる。
- ・居住地域へのニーズは「地産地消」、「お試し居住」、「医療との連携」、「交流」がキーワードとなっており、地域との交流や連携が必要である。

地方都市アンケート

(調査対象：人口 10～30 万人の地方都市 192 自治体に対するメールによる配布回収 回収 169)

調査票は全庁的な取り組み(企画部局向け)、住宅に関連する取り組み(住宅部局向け)、介護サービスに関する取り組み(福祉部局向け)の3種類を実施した。

<全庁的な取り組み>

- ・二地域・季節居住の取り組みは少ない状況(計 22 自治体、13.0%)
- ・その目的は、中心市街地の活性化、定住人口の増大、交流人口の増大となっている。

<住宅に関連する取り組み>

- ・住み替え促進策のメニューをみると、受け皿住宅の整備、情報提供、住宅の取得支援、空き家バンクが多い。
- ・滞在費用軽減のための取り組み例として、滞在施設の整備(新築、廃校等の遊休公共施設の活用)、空き家・既存施設の借り上げ等が見られる。

<介護サービスに関連する取り組み>

- ・高齢者の街なか居住促進の動機づけとして、高齢期に適した住まい、医療・介護サービス、コミュニティの充実などがあがっている。
- ・医療と福祉の連携を行っているのは 40.8%あり、連携の舞台となっているのは「地域包括支援センター」、「医療連携室」などである。

モデル都市(釧路市)調査

釧路市住民アンケート

(調査対象 20 歳以上の 1,566 人 郵送による配布回収 回収 513 票)

- ・現在の居住地から転居を考えている人は 30.2%あり、そのうち中心市街地及び周辺を考えている人は 31.5%。
- ・高齢者ほど街なかへの居住の関心が高い。60 歳以上では「冬期の季節居住」の関心が最も高くなっており、冬期の季節居住は高齢者でニーズが高い傾向がある。
- ・二地域居住する場合の同居者は、「配偶者」(35.8%)、「自分ひとり」(21.1%)で小家族が過半数を占める。
- ・居住スペースは、「居間+2 部屋」(44.3%)、「居間+1 部屋」(25.4%)が多い。
- ・住まいは共同住宅を志向であり、高齢者では他の世代と比べて介護サービスや共同生活型住宅など、安心して暮らせる住宅へのニーズが高い。
- ・二地域居住の追加経費(家賃・交通費等)は 3 万円未満が 34.6%となっており、中心市街地における二地域居住を促進する上では、居住者の経済事情に応じた住まいが提供できる仕組みが必要である。

郊外居住者面談調査(4 地区で実施 グループインタビュー)

- ・現在居住している地域は商業施設や医療機関等が身近になく、車を利用しなければならないため、将来の暮らしに不安を抱えている。また、除雪できなくなった時の住まいの維持に不安を感じていることから、一時的な二地域居住のニーズが一部で見られた。

二地域・季節居住を促進する上でのポイント

- ・ ~ の調査結果を踏まえると、二地域・季節居住を実現するためのポイントとして以下の2つが想定される。

街なかで様々な情報を得ながら医療面の安心のもとで二地域・季節居住を体験できること

上記のニーズに対応したトータルな情報相談対応体制、受け皿となる住まいの確保、医療・福祉や地域と連携した街なかでの暮らしのサポート体制を構築すること

(2) 街なかへの二地域・季節居住のパターン

- ・モデル都市（釧路市）調査も踏まえると、以下の3つのパターンが想定される。
 - A．郊外からの季節居住
 - B．広域圏（周辺の農山村）からの季節居住
 - C．大都市圏からの季節居住
- ・上記A・BとCでは、世帯属性や目的・動機が異なり、したがって、街なか季節居住における高齢者の住まいのイメージや生活支援サービスのニーズが異なることがわかった。
- ・街なかの受け皿となる高齢者の住まいや住まい方については、目的・動機により居住期間や住居費負担等の考え方が異なる以下のタイプが想定される。

高齢者向け賃貸住宅（外部サービス利用型、医療施設、福祉施設等との連携など）
一時滞在型施設

滞在費用等を抑制する住まい方（タイムシェア、ルームシェア）

- ・一つの住まいで季節居住が通年で実現することに加え、もう少し広い捉え方のもとで異なる世帯属性や目的・ニーズに対応した住まい方が実現できる仕組みを開発することが課題である。例えば、街なかに多様な住まい方を実現できる受け皿を用意し、それらをニーズに応じてシェアすることが考えられる。

(3) 街なか季節居住を推進する仕組みの提案

街なか季節居住に向けた検討課題

- ・これまでの調査から、二地域・季節居住の情報を得ながら、医療面の安心を確認し、実際に二地域・季節居住を体験し、地域の食文化や人々との交流を楽しみたいというニーズが高いことがわかった。
- ・これらのニーズに対応した住まいづくりと情報発信、医療機能の活用と連携、地域固有の資源や文化との交流、気軽に交流できる仕掛けづくりがライフケアビレッジに求められる機能であるといえる。
- ・一方、(2)で示したように、多様な住み替えの目的・動機を満足しながら、街なかでの魅力的な暮らしを実現する上では、次の3つの仕組みが必要である。

将来の生活設計を提案する生涯生活コンサルティング

資産等を活用しながら低廉なコスト負担で利用できる高齢者等の住まいの確保

旧住民のコミュニティ形成とこれを活かした生活支援サービス、医療・介護等との連携

季節居住、二地域居住の推進による一生涯暮らせる街なかの実現

- ・街なかでの季節居住の促進は、高齢者が安心して暮らせる住まいの選択肢を増やすとともに、暮らしを支える生活支援サービスの充実につながり、一生涯住み続けられる街なかを実現することになると期待される。
- ・街なかでの生涯にわたる住み替えをサポートする仕組みとして、高齢者のライフステージや身体状況や住み替えの目的・動機付けに併せた適切な住まいを確保できるよう、高齢者向けの賃貸住宅に加えて、体験入居が可能な住まい、一時滞在用住宅、住居費や滞在期間中のコストを抑えるための工夫（住宅のシェア）、持家等の資産を活用した住み替えなどが求められる。

街なかへの住み替え方策

- ・以上の検討課題を踏まえて、本調査では「事業コンソーシアム」により総合的な対応を行える体制を構築することを住み替え方策として提案している。
- ・事業コンソーシアムは、街なかへの住み替えの阻害要因を解決するとともに、ライフステージやライフスタイルに応じた最適な住まい、暮らし方を提案し支援する、様々な団体や企業等からなる多様な主体の連携プラットフォーム（推進組織）をイメージしている。
- ・具体的には、行政や専門家、住民、NPO等と協力連携し、事業に参加する開発業者、不動産流通業者、福祉事業者、その他企業等の出資により組織化を図る。
- ・事業コンソーシアムが、季節居住や二地域居住に必要な（3）で示した3つの仕組みをパッケージ化して提供することが考えられる。そのため、事業コンソーシアムは株式会社や中間法人等とすることが必要になると考えられる。
- ・実際の支援サービスの提供は、事業コンソーシアムに出資する事業者にアウトソーシングして行うことが考えられる。例えば、郊外の持家に居住する高齢者がその住宅を賃貸化し、街なかに居住する場合はコンソーシアムに加入する仲介業者や借り上げ主体（住宅管理会社など）が行うことなどが考えられる。
- ・事業コンソーシアムの収益源については、季節居住の居住者から徴収する管理費や付随して発生する事業の収益等を考えるなど、今後、検討が必要となる。